

郷土史この一冊

主旨…図書館開館百周年を記念し、この間に収集した鎌倉地域に関する郷土文献の代表的なものを紹介する。そのことにより、鎌倉やその歴史をより身近に感じ、また、生活している場としての鎌倉という場所の時間的な奥行きを少しでも感じてもらえれば幸いである。

もとより沢山ある郷土資料の中のわずかな部分にすぎないことは言うまでもない。

原則として、鎌倉地域で刊行された郷土資料を中心として紹介し、必要に応じて東京などの大手出版社のものも紹介した。

出版年は図書奥付等の表記を使い、西暦・元号を統一しなかった。

(H23.8.4改訂)

【通う—電車】

項目	図書	内容
横須賀線	K1-686.2「THE 100横須賀線・鎌倉駅」 鎌倉駅事業百周年記念事業実行委員会・編 協力/木村彦三郎・三浦勝男 (平成元年)	明治22年の横須賀線鎌倉駅の誕生から百年の歴史を、当時の工事から各駅の模様やエピソードを文と写真で綴る記念誌。金子晋「回想の鎌倉駅」島本千也「高浜虚子『道』に描かれた鎌倉」も収める。
	K1-686.2「横須賀線百二十周年 大船・鎌倉」 横須賀線百二十周年記念事業実行委員会・編 (平成21年)	百周年の歴史をふまえ、横須賀線開通以来の歴史や最近の話題もふまえながら、読み物とカラー写真などで構成している。横須賀線や鎌倉駅・大船駅の歴史の案内書。
	K1-686「横須賀線物語」 小坂宣雄・著 (「かまくら春秋」1988年6月～1989年5月連載分のコピー)	横須賀線誕生から当時の時刻表や運賃、大船駅や北鎌倉駅、戦時下の鉄道や事故、ガードなどの沿線風景など、広く資料にあたり、尚且つわかりやすく書かれている。横須賀線と鎌倉駅のことはこれ一冊でわかる。
江ノ電	K1-686.9「江ノ電六十年記」 江ノ島鎌倉観光株式会社 会社六十年史編纂委員会・編 (昭和38年)	明治35年、鎌倉・藤沢間に開通した「江ノ島電車」が後に通称「江ノ電」となって地域住民に親しまれる歴史を、文と写真で綴っている。創業当時の社員による座談会「思い出の江ノ電を語る」を収める。
	K1-686.9「江ノ電の100年」 江ノ島電鉄株式会社 開業100周年記念誌編纂室・編 (平成14年)	2002(平成14)年百周年を迎えた江ノ電の歴史を、思い出の写真やカラー写真も含め紹介している。前著の60周年記念誌以降の最新の事業もわかる。巻末の年表もわかりやすい。
	K1-686.9「江ノ電ぶらり旅」 君塚利啓・著 (江ノ島電鉄株式会社 2010年)	最も新しい江ノ電のガイドブック。江ノ電の歴史から、各駅ごとの紹介や周辺の観光名所まで、写真も多数あり、グラフィック版として手に取り見やすい。
	K1-686.9「江ノ電鉄道史」(七十年間の歩み) 飛田康行・著 江ノ電鉄道同好会・発行 (昭和50年)	江ノ電鉄道同好会代表飛田氏による江ノ電創業からの70年の歴史。巻末の駅名変遷一覧などもわかりやすい。手書き資料。

【住む—都市の形成】

項目	図書	内容
別荘	K1-291.3「鎌倉別荘物語」	明治・大正時代に別荘地として開かれた鎌倉の姿

	島本千也・著 (1993年)	を丹念に調査した一冊で、その歴史や地域ごとの代表的な別荘の紹介のほか、文学作品や別荘建築にまで話が及んでいる。 なお、同じ著者に「鎌倉・都市の記憶」(1988年)「海辺の憩い 湘南別荘物語」(2001年)もある。
鎌倉山	K1-291.3「現在の鎌倉」 大橋良平・著 (通友社 明治45年)	明治45年にまとめられた最も早い時期の鎌倉の案内記で、地理・人口・国宝の紹介のほか、当時の避暑地としての鎌倉や借家、別荘や商店一覧が載せてあり、明治末の鎌倉を知るための必携本。
	K1-291.3「鎌倉山正史」 米山尚志・著 (平成7年)	明治末から大正時代にかけて別荘地、高級住宅街として開発された鎌倉山の歴史を知るための一冊。当初の構想から宅地分譲、住宅事情を多数の写真とともに解明している。
	K1-291.3「叢談 鎌倉山」 不動健治・著 (鎌倉山風致保存会 昭和46年)	鎌倉山の歴史を中世から説き起こし、大正時代の鎌倉山の開発から戦中・戦後の昭和45年に至るまでを描いている。
大船田園都市構想	K1-518.8「幻の田園都市から松竹映画都市へ—大正・昭和の大船町の記憶から—」 監修／藤谷陽悦 鎌倉市中央図書館近代史資料室・編 (平成17年)	大正末に大船駅東側一帯を「田園都市」構想のもとに開発した歴史を辿りなおしたもので、その後の金融恐慌で頓挫し、松竹大船撮影所が移転するまでを多数の写真とともに描き出している。大船の埋もれた歴史や都市構想を知るための必読書。
大船	K1-291.3「大船の歴史」 (北鎌倉台土地区画整理組合 2006年)	古代から明治までの大船地域の歴史や史跡文化財から民間信仰の跡、村での生活や用水等に至るまでを述べたもの。 なお、大船に住む自転車屋さんが自伝的に地域の歴史を書いたものとして、佐々木泰三「水の出る街、大船—ある自転車職人の自伝—」(平成11年)がある。
大町	K1-291.3「鎌倉大町 昔の街並み—昭和十五年頃の町並みを語る—」 鎌倉市中央図書館近代史資料室 (平成18年)	昭和15年当時の大町の町並みを多くの写真や資料とともに紹介している。長年大町に住み続けている古老たちの座談会も収める。
	K1-388.1「鎌倉大町いまむかし」 新藤澤一・著 (リープ企画 1998年)	明治38年生まれ著者が、震災前から昭和にかけての、自分の生まれ育った大町の生活の様子や街並みを目に浮かぶように綴ったもの。軒先のたたずまいがまるでその時代にタイムスリップして一緒に町を歩いているかのように鮮やかにとらえられている。
	K1-291.3「大町名越ゲエもネエ話」 吉田友一・著 (平成5年)	昭和初期の大町の町の様子や寺社、新しく出来た別荘の話が、祭りや縁日の話とともに語られる。手書きの資料。
御成町	K1-291.3「鎌倉御成町いまむかし」 「鎌倉御成町いまむかし」編集委員会・編 (冬花社 2008年)	鎌倉駅西口一帯の御成町の古代から近現代に至る歴史。鎌倉駅の開業や鎌倉御用邸、御成尋常高等小学校をはじめ映画館や市役所など、周辺の建物、地誌がコンパクトに説明されている。なお、御成町の町名は昭和40年からで、元は大町・小町の一部からなり、

津村	K1-380「時のながれ 津村のながれ」 井上六郎・著 (平成3年)	御用邸のあたりは蔵屋敷という字名であった。 昭和35年頃、農業で川のうなぎが死に絶え、それからブルドーザーで宅地造成が行われ、昭和46年モノレールが開通して津村は一挙に変わっていった。のっぺらぼうな住宅地になる前の津村という小世界が持っていた、豊かな共同体や自然の姿を哀惜をこめて記録している。手書き資料。
門前町	K1-210.5「鎌倉の社寺門前町」 木村彦三郎・著(鎌倉近代史資料集第5集) (鎌倉市中央図書館・発行 平成3年)	鶴岡八幡宮、円覚寺、建長寺、光明寺、長谷寺の五つの門前町の江戸期以降の歴史を、農業のかたわら職人や「ぼてふり」(荷い商人)として生きた人々の姿をたどる。神社仏閣を美術や信仰面ではなく、生業との関連でとらえた鮮やかな一書。

【泊まる】

項目	図書	内容
大石本陣	K1-051「鎌倉」77号、78号所収論文 平田恵美「御屋形様御参詣並御名代記留」 (鎌倉文化研究会・発行 平成7年)	江戸時代、八幡宮前の雪の下に本陣を構えていた大石本陣についての復刻資料。寛永12年以降の記録を嘉永4年に何らかの理由で写したもののだが、慶応4年の項目に村田新八や西郷吉之助の名前が見える。
海浜ホテル	K1-051「鎌倉」第34号所収論文 相原典夫「鎌倉海浜ホテル考」 (鎌倉文化研究会 昭和55年5月)	明治中期から昭和20年の火事で焼失するまで、鎌倉には帝国ホテルと並び称される「鎌倉海浜ホテル」があった。この論文はそのホテルの歴史を、前身の「保養所海浜院」から丁寧に文献を猟集し解明したもの。

【リゾート地の展開】

項目	図書	内容
海水浴	K1-291.3「鎌倉の海」 愛されて100年鎌倉海水浴場記念事業実行委員会・編 (昭和58年)	海水浴にまつわる思い出を、田村隆一、永井龍男、永井路子、安西篤子など著名人20氏のエッセイを中心にまとめ、他に鎌倉の海をよく知る古老による座談会や中世以来の「鎌倉の海変遷史」の年表も収める。
	K1-361.7「鎌倉と海水浴」(「コレクション・モダン都市文化」54) 原田香織・編 (ゆまに書房 2009年)	明治末から大正・昭和初期にかけて出版された鎌倉と海水浴に関する本や雑誌の復刻版。「海水浴」(1899年)、「海の銀座」(1936年)、「海水浴場」(1929年)、「海の銀座 カマクラ・ニュース」(1935年)、「モダン海浜ハンティング」(1936年)、「文壇人カメラコンクール」(1937年)など。「モダン」を合言葉に、今日につながる早熟な大衆社会状況が垣間見える。
鎌倉カーニバル	K1-291.3「鎌倉カーニバル関係資料」 (新聞資料の切り抜きファイル)	昭和9年に久米正雄や大仏次郎の提唱により始まった「鎌倉カーニバル」については、まとまった書物はない。この資料は『図説鎌倉回顧』や『鎌倉再見』などの本に散見される記述箇所や、戦後の昭和22年から

	914.6 清水基吉「鎌倉カーニバル余録」 (同『川のほとり』永田書店 平成5年所収)	34年までの新聞資料をコピーしファイルしたもので、当時の雰囲気がよくつかめる。 若い頃、カーニバルの文士劇に出演した著者による回想。当時の鎌倉文士の姿が活き活きととらえられている。
--	--	---

【はじめて作る】

項目	図書	内容
鎌倉ハム	K1-673.1「鎌倉ハム富岡商会100年の歩み」 鎌倉ハム富岡商会・編 (平成12年) K1-318.5「かまくらっ子」 平成5年34号(鎌倉ハム)	1900年に創業され、明治期に日本のハムの代表でもあった「鎌倉ハム」百年の歴史をまとめたもの。ハム製造の工程の紹介や團伊玖磨や帝国ホテル総料理長村上信夫の寄稿も掲載。 なお創業者の自伝もある(富岡周吉郎「汗馱句乃記 鎌倉とわたし」かまくら春秋社 昭和57年)。また、雑誌「鎌倉」創刊号(大正15年4月)にも「名物鎌倉ハムの歴史」があり、創業時の話が要領よくまとめられている。 鎌倉市広報の小学生版だが、鎌倉ハムの歴史や作業工程、生産量など現況もわかりやすく書かれている。

【集う】

項目	図書	内容
鎌倉同人会	K1-318.8「鎌倉同人会五拾年史」 鎌倉同人会・編 (1965年)	1915(大正4)年陸奥広吉伯の主唱により創立された鎌倉同人会は、段葛改修や鎌倉国宝館建設など、鎌倉地域の歴史環境の整備や街づくりに多大の功績を残した。大正から昭和に至る鎌倉の街づくりの歴史をたどるための必見の書。また、初期のものだが相澤善三「鎌倉同人会の歴史」(雑誌「鎌倉」大正15年8月号所収)も概略をつかむためにはよい。 なお、続編として「鎌倉同人会八拾年史」(1995年)もある。
鎌倉倶楽部	K1-318.8「鎌倉同人会五拾年史」 鎌倉同人会・編 (1965年)	別荘在住者の親睦会として、1908(明治41)年、柴山海軍大将を幹事長として設立された。陸奥広吉等も参加し、娯楽会、書画会、生花会などのサークル活動のほか購買組合も作った。また、1920(大正9)年、東京で開かれた第八回世界日曜学校大会に出席した各国の代表963名が鎌倉観光のため特別列車でやって来た際、同人会陸奥広吉伯爵の主唱で大規模な鎌倉歓迎会が開催された(沢寿郎「知られざる鎌倉」205～213ページに詳しい)。関東大震災により解散した。
湘南倶楽部	289.1イ「湛山回想」 石橋湛山・著 (岩波文庫 1985年)	1924(大正13)年、石橋湛山が中心となって結成された。明治中期以降、鎌倉に別荘族が増えるとともに、その金銭感覚が鎌倉の高物価を招いていた。それに対し、米・味噌・

鎌倉三日会	K1-318.8「鎌倉三日会 創立30周年記念」 秋月正一・編 (鎌倉三日会 昭和57年)	<p>しょうゆ等の日用品を適正な価格で販売する消費組合を作ったもの。昭和14年に解散。「湛山回想」(岩波文庫)302～6ページのほか「鎌倉御成町いまむかし」34ページにも解説がある。また、木村彦三郎「鎌倉記憶帖」所収の「湘南倶楽部」も参照のこと。他には、金子晋「湘南倶楽部」(「鎌倉タイムス」1989年4月5日号)など。</p> <p>昭和26年に結成された「三日会」は、地域の共通問題をともに考える市民団体として出発した。学者・医師・専門家・経営者など市民の中から選ばれた「良識の士」により構成され、主に市政に関する提言を行ってきた。機関誌「鎌倉市民」を昭和34年1月から発行し、6号まで刊行したところで、昭和36年4月号より原実氏の単独経営となり「鎌倉市民」は独立した。それは、少数精鋭の「名士」の集まりから、ヨリ広い市民層へと呼びかける雑誌の始まりでもあった。</p> <p>なお、三日会には続編として「鎌倉三日会の五十年」(平成13年)もある。</p>
図書館とともだち・鎌倉	K1-010「図書館とともだち・鎌倉 おしらせ」 図書館とともだち鎌倉・編集 (図書館とともだち・鎌倉 1998～)	<p>本が好きで、図書館が好きなたちが7人、1998年1月に初めて集まり、図書館についてもっと知りたい、よりよい図書館づくりを市民の側から考えたい、とスタートさせた会。今や会員も百人を超え、図書館見学会や講演会、読書会など、本と人とのかわりを支援する活動を着実に進めている。本と人が出会うところにドアが開かれ、新しい風景が見え始める。</p>
市民団体	K1-335.8「市民活動ガイドブック」 特定非営利活動法人 鎌倉市市民活動センター運営会議・編 (NPOセンター鎌倉 平成15年)	<p>市民の自発的結社として、市民生活にかかわる多くの分野で市民団体が活動している。これは市内約200団体の案内。福祉・まちづくり・環境・子どもなど実に多くの団体が活動していることがわかる。市民自身がお互いに助け合い、お互いの向上をはかるところに「社会」は再生する。</p> <p>ほかに、「鎌倉市民活動白書 風と潮流—これからの地域と市民社会—」(2000年)もより踏み込んで各団体の活動を紹介している。</p>
	K1-519.8「谷戸だより集」 (山崎の谷戸を愛する会 1998年)	<p>鎌倉でも数少ないまともな自然環境が残されている山崎地域を、「開発」という画一的計画や金銭への還元を疑問に思い、立ち上がった人々による会報を一冊にまとめたもの。谷戸歩きや雑木林の手入れ、炭焼きなど、「里山」を体感する様々な試みからは、人間もまた自然の一部であること、外なる自然を壊す者は内なる自然(人間性=ヒューマンネイチャー)をも壊すことにつながることを教えている。大地という底辺から動植物層に至るまで、世界は層をなしている一つのまとまりであることを見失う時、金銭勘定の計算能力だけに長けた蛮行だけが横行する。</p>

教会	<p>鎌倉雪ノ下教会 K1-195.3「神の民として生きる」(1998年) K1-195.3「続・神の力に生かされて」(1992年) (日本基督教団鎌倉雪ノ下教会長老会)</p> <p>日本基督教団鎌倉教会 K1-914.6「昭和の鎌倉 私の思い出」 今田正廣・著 (かまくら春秋社 平成18年)</p> <p>K1-521「鎌倉の景観重要建築物(指定洋風建築物 K1-521「館のある街—湘南散歩—」</p> <p>鎌倉山教会 K1-198.3「トタン屋根の牧会者—鎌倉山教会と 門馬義久—」 (鎌倉山教会 2001年)</p>	<p>1917年植村正久牧師を迎え、小さな礼拝を行っていたのが始まりという。この本の年表でその歴史をうかがえる。年表以外の部分は全て信仰告白にあてられている。なお、植村正久については、京極純一「植村正久—その人と思想—」(新教出版社)が詳しい。</p> <p>大正15年生まれの著者が、当時としてはハイカラなハリス幼稚園に通ったのだが、著者のこの自伝的回想の中にその歴史が若干語られている(20~29ページ)。それによると、鎌倉教会は明治29年に美山貫一牧師が長谷に日曜学校を開いたのが始まりという。ハリス幼稚園も明治43年に誕生。なお、美山貫一については、高見沢潤子「愛に生きた人々」(日本基督教団出版局、1994年)に詳しい。</p> <p>いずれも新聞切り抜きだが、ハリス幼稚園の解説がある。</p> <p>昭和27年、北畠八穂、門馬義久、白柳美彦の三人で始められた日曜学校が元となって誕生した。北畠八穂は深田久弥の若き頃のパートナーであり、門馬義久は第九回長谷川伸賞の受賞者。この追悼文集には、村上光彦、三浦綾子、清水基吉らが文を寄せる。</p> <p>なお、朝日新聞記者時代の門馬氏の愉快的エピソードについて、門田勲「古い手帖から」(朝日新聞社、昭和49年)176~8ページに載っている。</p> <p>(なお、雪の下にあるカトリック教会については、郷土資料の中に適当なものがないため省略した。)</p>
----	--	---

【文学者たち】

項目	図書	内容
鎌倉文士	<p>K1-910.26「現代鎌倉文士」 鹿児島達雄・著 (かまくら春秋社 昭和59年)</p> <p>K1-910.26「鎌倉と作家たち」 中央図書館近代史資料収集担当 (広報かまくら 昭和54~56年)</p>	<p>明治・大正・昭和三代に鎌倉に移り住んだ文学者たちの鎌倉での足跡をたどっている。島崎藤村・夏目漱石から芥川龍之介、大仏次朗、そして川端康成、小林秀雄など鎌倉文士のかかわりを知るための定評ある一冊。(勿論、鎌倉文士についてはこの他にも巖谷大四「文壇資料鎌倉・逗子」(講談社 1980年)などもあるが、ローカルな資料を優先した)</p> <p>市広報に50回にわたって連載された鎌倉ゆかりの作家たちの紹介と解説。長年にわたり郷土史家としてそれら作家たちの作品</p>

鎌倉文庫	K1-910.26「別冊かまくら春秋 特集・鎌倉文庫」 (かまくら春秋社 昭和60年)	に親しんできた著者(木村彦三郎氏)ならではの理解の行き届いた文章により、コラムながらも作家の生き方や姿が彷彿とする。
	K1-910.26「鎌倉文庫と文芸雑誌『人間』」 小田切進・監修 (大空社 1993年)	貸本屋「鎌倉文庫」の他に、出版事業として雑誌『人間』などを出していた作家たちの活動を、当事者である川端や高見順をはじめ、関係者の思い出や歴史的資料で構成している。
鎌倉ペンクラブ	K1-726.1「わが人生 横山隆一」 横山隆一・著 (神奈川新聞 1985年) (新聞切り抜きファイル)	マンガの「フクチャン」でおなじみの横山隆一は、小説家ではないが鎌倉文士の遊びの輪の中には欠かすことのできない人物であった。鎌倉カーニバルや文士の飲み会には必ずと言ってよいほど横山隆一の姿があった。これは新聞連載記事だが所々で在りし日の文士たちの姿を伝えている。なお、昭和11年に結成された親睦団体である鎌倉ペンクラブに関しては、横山隆一「鎌倉 夏の終わりに—ペンクラブ始末記」(読売新聞夕刊昭和59年8月21日～24日)が、その初期から鎌倉カーニバルの様態までを含め描いている。大仏次郎や里見弴、久米正雄など文士たちの日常の姿が垣間見える。
文学者全般	K1-910.26「文学都市かまくら100人」 鎌倉文学館・編 (鎌倉文学館 平成17年)	文学館開館20周年記念「文学都市鎌倉100人展」に際し刊行された図録。明治から平成に至る鎌倉ゆかりの作家100人のプロフィールが収められている。鎌倉ゆかりの作品の引用もあり、見て、引いて楽しめる。
	K1-910.26「鎌倉 文学の理想郷」 神奈川文学振興会・編 (神奈川近代文学館 1995年)	1995年に開催された県立神奈川近代文学館の展示図録。明治から昭和に至る鎌倉ゆかり作家について、要領を得た解説がほどこされている。岡松和夫・田村隆一・三木卓などの作家も寄稿し、内容が充実している。
	K0-910.26「神奈川近代文学年表 文学者たちの神奈川 (明治編／大正・昭和初期編)」 神奈川文学振興会・編 (県立神奈川近代文学館 1995年)	明治から昭和20年まで、神奈川県に足跡を残した文学者たちの編年式の年表。誰がいつどこで何をしていたのかが、出典共々わかる年表で、巻末に人名と地名の索引が付き、引きやすい。大変な労作。
	K0-910.26「神奈川県近代文学資料」 第1～11集 (神奈川県高等学校教科 研究会国語部会)	県内高校の国語部会の先生たちによる、神奈川県ゆかりの文学者たちの引用からなるもので、県内の場所とのかかわりが一目瞭然となる労作。昭和29年以降編集作業が行われ、第一集が刊行された昭和58年から第十一集の平成10年まで大変な労力により刊行された。

	<p>K1-291.3「鎌倉もうひとつの貌」 染谷孝哉・著 (滄海出版 1980年)</p> <p>K1-281「鎌倉近代史資料 その1 人物編(1)」 (鎌倉市中央図書館 昭和54年)</p> <p>K1-911.30「鎌倉の俳人 江戸・明治」 (鎌倉近代史資料第6集) 木村彦三郎・編 (鎌倉市中央図書館 1985年)</p>	<p>作家だけではなく広く哲学者や歴史学者など文化人と鎌倉との来歴を丹念に調べ上げたもの。文学者以外で誰がどこに住んでいたのかがわかる。その知見の広さに感心。</p> <p>明治・大正・昭和の時代に、鎌倉に居住した文学者の人物事典。ただし狭義の作家・評論家だけでなく、学者、政治家、実業家でも文学に関する作品・著作をなした人々まで収録している。主に木村彦三郎氏の手になるもの。生年・没年、鎌倉での居住先、作品からなる。</p> <p>鎌倉と文学というと、つい鎌倉文士など近現代の作家に注目しがちだが、この本はそれ以前に豊かな地域文化があったことを教えてくれる。江戸時代の17世紀後半から明治時代中期までの、鎌倉の俳人に関し有名無名にかかわらず紹介している。「若竹やとまる雀もおない年」(小坂米舎)。「虫干や世の無事見ゆる太刀の錆」(鎌州)。「白雨や砂に粒立つ由比ガ浜」「夕暮や日傘帆にして渡し船」(松寿)。「さびしさを掃き寄せて置く落葉哉」(文著)。「眠る子の手から董こぼれけり」(梅志)。「苗代や日と水との夕明り」(鬼角)。「閑取の腕にやさしき螢かな」(宗慶)。「俳も清水にうつせ星月夜」(輝牛)。こうした俳諧文化は鎌倉のみならず全国に存在した。</p>
--	---	--

【学び舎】

項目	図書	内容
<p>鎌倉女学院</p> <p>学校</p> <p>鎌倉アカデミア</p>	<p>K1-376.4「鎌倉そして鎌女」 (鎌倉女学院 昭和56年)</p> <p>K1-372「鎌倉教育史」 (鎌倉市教育委員会 昭和49年)</p> <p>K1-372「続・鎌倉教育史」 (鎌倉市教育委員会 平成4年)</p> <p>K1-377.2「青春・鎌倉アカデミア―「鎌倉大学」の人々―」 鎌倉市中央図書館近代史資料室 平田恵美・編 (鎌倉市教育委員会 平成9年)</p>	<p>明治37年に女子教育の嚆矢として開校した鎌倉高等女学校の77年の歴史をたどったもの。創設者田辺新之助(哲学者田辺元の父)の女子教育への熱意と開校までの苦労も含め、時代や地域の様子がわかる。</p> <p>鎌倉における学校教育の歴史を、正編は明治から昭和20年代前半までを、続編は昭和20年代後半から昭和60年代までを扱っている。見開き2ページで一つの主題が扱われ、見やすく、且つ分かりやすい内容となっており、長年にわたる丹念な資料の収集と学校教育への熟知の上に立って書かれている。</p> <p>敗戦直後の昭和21年、鎌倉で誕生した「鎌倉アカデミア」についての資料集。三枝博音、林達夫、村山知義、吉野秀雄、西郷信綱、片岡良一、中村光夫、服部之聡、三上次男、大仏次朗、高見順、神西清ら豪華な教授陣を擁し、卒業生に前田武彦、いずみたく、鈴木清順、山口瞳、坂下圭八らを輩出した。「それぞれの思想が薔薇の花のように香っていた」(西郷信綱)優秀な教師集団も含め、鎌倉アカデミアについて今後研究する際には必ず潜らねばならない一大資料集。</p>

<p>保育</p>	<p>K1-377.2『鎌倉アカデミア』落穂集 —創立六十年記念文集— 60年祭実行委員会・編 (鎌倉アカデミア創立60周年祭実行委員会 ・発行 平成18年)</p> <p>K1-369.4「創立七十年史」 鎌倉保育園・編 (鎌倉保育園・発行 昭和40年)</p>	<p>なお、平田恵美「鎌倉アカデミアの人々」 (「郷土神奈川」第40号、平成14年)も参照の こと。</p> <p>鎌倉アカデミアの教授陣や卒業生による 文集。現代の松下村塾として「塾」的な場が いかに個々の学生に忘れがたい印象を残し、 その後の生き方に多大な影響を与えたか が、その後何十年と経とうとも一本の矢印の 如くにその資質に刻印されていることが証言 されている。</p> <p>他に山口瞳『小説・吉野秀雄先生』(文藝春秋 昭和44年)も当時の雰囲気にとらえられている。</p> <p>救貧施設としての「孤児院」ではなく、子供たち の親代わりとして小児保育を志した佐竹首次郎 が明治28年に小児保育園を設立してからの 60年の歴史。日本の社会事業がどのような 「志」とともに誕生し、その後の歴史の中で どんな問題に直面し、どんな展開を遂げたか がわかる。</p>
-----------	--	---

【天変地異】

項目	図書	内容
<p>関東大震災</p>	<p>K1-210.69「大正十二年九月一日大震災 記念写真帳」 榊井照蔵・編 (神奈川県震災写真帖頒布事務所・発行 大正十四年)</p> <p>K1-210.69「関東大震災写真帖」 日本聯合通信社・編発行 (大正十二年)</p> <p>K1-210.69「鎌倉震災史」 (鎌倉町役場・発行 昭和5年)</p>	<p>神奈川県技師榊井照蔵氏による神奈川県内 の生々しい罹災状況が写されている。</p> <p>東京及び神奈川県内の地震直後の写真が 見開きの解説とともに収められている。</p> <p>鎌倉市内の被害状況(地震・火災・津波) や救護活動について細大漏らさず叙述 されている。</p>
<p>災害史</p>	<p>K1-210.6「鎌倉災害年表稿—近世・近代—」 鎌倉郷土資料研究会・編 1990年</p> <p>K1-369.3「神奈川県アポイドマップ 鎌倉市版」 神奈川県環境部環境管理課・編 (神奈川県・発行 1989年)</p> <p>K1-369.3「鎌倉市防災マップ」 鎌倉市企画部総合防災課・編 (鎌倉市・発行 2004年)</p>	<p>江戸初期から昭和20年までの鎌倉地域に 起きた風水害・火災・疾病・地震などの災害 年表。木村彦三郎氏を中心とした近世文書 解読の中から生まれた、災害の発生だけで なくその対応もわかる読む年表。大状況を 叙述する政治史や経済史にはない暮らし ぶりを、時代を生きた人々の生活に寄り添い、 描き出している。</p> <p>過去の風水害・地震災害・土砂災害のデー タが掲載されている。</p> <p>過去の自然災害の被害状況を地図に示した もので、各地域ごとの4枚の地図からなる。 自分の住む地域の危険箇所が一目でわかる。</p>

【戦争】

項目	図書	内容
太平洋戦争	K1-210.7「鎌倉・太平洋戦争の痕跡」 鎌倉市中央図書館近代史資料室・ CPCの会・編 (平成16年)	鎌倉市内にある防空壕・陣地・軍関係施設などの太平洋戦争の痕跡を足で歩いて調査したもの。他に勤労働員の様子や子供の目から見た当時の大人の姿などの体験談が生き生きと語られている。「CPCの会」は、退職者のボランティア団体「生涯現役の会」の分科会として地域(Community)への文化的貢献(Contribution)、を写真(Photograph)の記録性により行おうとするサークル。
	K1-210.75「鎌倉の忠魂碑・戦没者慰霊碑と記念碑」 鎌倉市中央図書館近代史資料室・ CPCの会・編 (平成14年)	明治の日清・日露戦争から昭和の太平洋戦争に至るまでの慰霊碑・忠魂碑を鎌倉市内をくまなく歩き回って調査したもの。その過程で「銃後」の生活や「本土決戦」に動員された人々の体験談に接し、それが前著へと結晶した。
	K1-210.76「回想－戦争と鎌倉人」 (戦争体験記出版委員会・編 1996年)	戦争体験者が急速に減る中、「鎌倉朝日」の協力のもとに募集された鎌倉在住者による戦争体験記。戦時下の鎌倉の生活や、南方・中国での戦争体験、シベリアへの抑留体験、学徒出陣などの記録集。巻末に各界の代表者による座談会「戦時下の鎌倉」が語られる。元・鎌倉市長や鎌倉を代表する寺の住職、郷土史家や外交評論家なども書いている。
	K1-210.6「大船捕虜収容所始末記／大船捕虜収容所／富士飛行機を追って」 (再編集コピー版)	「大船捕虜収容所始末記」(実松讓)、「大船捕虜収容所」(鈴木淳)、「富士飛行機を追って」(清田昌弘)の3編からなる。鎌倉にあった戦争遺跡として、他の出版物から再編集しまとめられたもの。

【開発と自然環境】

項目	図書	内容
風致保存	K1-318.7「古都保存法三十年史」 (財団法人 古都保存財団・発行 平成9年)	京都・奈良・鎌倉における古都保存法の歩みや今後の課題についてまとめられている。古都保存法発祥の地としての鎌倉をはじめとし、歴史的環境を大切にすることの価値が問いかけられている。平山郁夫や河合隼雄らの寄稿もある。
	K1-318.7「歴史的風土の保存―「鎌倉市民の日々―」 原実・著 (アカンサス建築工房 1989年)	1962年、鎌倉八幡宮裏山(御谷)の宅造計画に反対し、市民運動を組織した原実氏が古都保存法の制定にかかわるまでを描いたもの。雑誌「鎌倉市民」を主宰し、自然破壊が環境破壊だけでなく歴史的伝承もまた破壊することを見抜き、大仏次郎をはじめ多くの人々の共感を呼び、遂には古都保存法の制定にこぎつける力となってゆく有様が描かれている。
	K1-519.8「鎌倉広町の森はかくて守られた―市民運動25年間の軌跡―」	鎌倉市の西南部に広がる60ヘクタールの広町緑地が開発されようとした時、その豊か

自然	<p>鎌倉の自然を守る連合会・著 (南港の人 2008年)</p>	<p>で貴重な森を守ろうと立ち上がった人々の25年にわたる市民運動の記録。身近な森とは単なる売却される「物件」ではなく、人々がそこで息をつき、自然界の一員であることを実感する場所でもある。それは人間を見つめ直し生活を豊かにする指標ともなる。</p>
	<p>K1-518.8「鎌倉市緑の基本計画」 鎌倉市景観部みどり課・編 (鎌倉市 平成18年)</p>	<p>平成8年、全国に先駆けて緑の基本計画を策定した鎌倉市の平成18年度版報告書。市街地の緑や樹林帯、都市公園を多面的機能を有する資源として保存・整備してゆくことの大切さを、多くの写真や図を用いて展開している。</p>
	<p>K1-400「鎌倉の自然」 鎌倉市教育センター・編 (鎌倉市教育委員会・発行 平成15年)</p>	<p>鎌倉の気候・地形・地質・動植物について写真を多用してわかりやすく説明している。中学生用の副読本ながら、大人が読んだり調べ物をするのにも十分役立つ。</p>
	<p>K1-462.1「鎌倉の自然シリーズ」 (「鎌倉市民」連載 第33号～72号)</p>	<p>「鎌倉市民」に連載された鎌倉の自然についての部分を集めたもの。「水と微生物」「草と木」「空と海」「昆虫と小動物」「大地震と鎌倉」「霜と地形」「春のつみ草」「鎌倉の谷めぐり」「磯の小動物」など、各分野の専門家や大学教授が鎌倉の動植物や自然についてわかりやすく書いている。これ一冊で鎌倉という地の自然の履歴書がひと通りわかる。</p>
	<p>K1-400「自然はたからもの」 (「広報かまくら」連載 2000年7月15日号～2009年4月15日号の切り抜き)</p>	<p>かつて市の広報誌に連載されたものだが、鎌倉の動植物全般にわたり教員や自然研究グループ、農家、森林インストラクター、博物館学芸員など多種多様な人々が書いている。短いコラムの中に、身近な自然の中にある小さな生き物たちの生きる営みがわかりやすく書かれている。</p>
	<p>K1-914.6「鎌倉の四季」 那須良輔・著 (六興出版 昭和58年)</p>	<p>著名な漫画家によるエッセイ集だが、表題のとおり鎌倉の四季をめぐる花や木、野草について、折々の風物や有名無名の行き来した人々との思い出をまじえて書いている。人に対する豊かな思い出と自然に対する鋭い観察眼が随所に生き、自筆の挿絵ともども読んで楽しめる。</p>
	<p>K1-071「鎌倉朝日」2004年1月1日号～ 「鎌倉花めぐり」小林千穂・文 松原省吾・写真 (鎌倉朝日新聞社)</p> <p>K1-071「鎌倉朝日」2002年1月1日号～ 「鳥とりどり」岡田泰明・文 梅田孝・写真 (鎌倉朝日新聞社)</p>	<p>地元誌に連載されている花と野鳥に関するコラム記事だが、短いスペースの中で簡潔に動植物の生活形や生態が説明されており、日々の生活の中で観察眼を鍛えてくれる。散歩などの際に季節ごとの楽しみを教えている。身の回りを振り返る余裕すらないのが今という時代だが、人間の時間とは異なる自然のリズムや時間を感じる時、周囲を眺めるゆとりが生まれる。日常身の周りの小さいことかもしれないが、その小さいものにより人は支えられるのではあるまいか。</p>

【道】

項目	図書	内容
古道	K1-682.1「鎌倉の古道」 阿部正道・著 (鎌倉国宝館・発行 昭和33年)	前編は中世の政治都市として発達した鎌倉の主要街路の配置や人口、切り通しについて、後編は鎌倉に通じる県内や房総にかつてあった「鎌倉街道」について近世までの変遷を詳述している。 なお、同じ著者による「神奈川県内の鎌倉街道概説—県内「京都鎌倉往還」を中心に—」(「神奈川県立博物館研究報告」第7号、1977年)は要領よくまとめられている上に、詳細な地図や現在の場所を示す写真もあり役立つ。
切通し	K1-682.1「鎌倉の切通し」 鎌倉の切通し研究グループ・編 (栄光学園 1995年)	切通しについて歴史家の書いたものとしては三浦勝男『鎌倉の史跡』などがあるが、ほかにも市内高校の生徒たちによるこうした作品もある。資料を読み、実際に歩いてみた記録。 また、同校の鎌倉研究会では「鎌倉の川」も出している(市内を流れる滑川や逆川などの川の流域をまとめたもの)。
	K1-291.3「鎌倉 その風土と歴史探訪」 川副博・川副武胤・著 (読売新聞社 昭和50年)	鎌倉全般の案内書だが、各地域ごとの切通しについて歴史的事実を述べている。鎌倉は三方を山に囲まれているため、出入りは切通しを通らねばならない。極楽寺坂、大佛坂、化粧坂、亀ヶ谷、名越、巨福呂坂、朝夷奈坂の七か所をいう。
	K1-291.3「鎌倉の名数」 長峰忠雄・著 (雑誌『鎌倉市民』第60～102号に連載)	雑誌『鎌倉市民』に連載された鎌倉の数に関する事項(五山、五名水とか十井、十橋など)を紹介・解説したもののだが、鎌倉七口として各切通しについて歴史的事実だけでなくエピソードや現況、明治以降の展開などにもふれている面白く読めるエッセイ。
	K0-051「かながわ風土記」第330号所収論文 後藤正吉「古都鎌倉を尋ねる」 (丸井図書出版 平成17年)	個別論文だが切通しについて簡にして要を得たものとして挙げておく。写真や切通し一覧表のほか、切通し名称に関する文献一覧もある。

【暮らし】

項目	図書	内容
昔の暮らし	K1-380「としよりのはなし」 鎌倉市教育委員会・編(木村彦三郎・著) (鎌倉市教育委員会・発行 昭和46年)	市内各地域の古老の話を採集したもので、明治以降の時代の変遷とともに変わりゆく生活様式や各地域の姿が浮かび出る。人々の生業や信仰、楽しみや出来事がその語り口とともに生き生きとよみがえる。
	K1-382.1「鎌倉の民俗」 大藤ゆき・著 (かまくら春秋社 昭和52年)	柳田國男に師事した著者による、明治以降の農山漁村時代の生活習慣についての民俗誌。この地に住み、生きた人々のつつましくもたくましい、またおらかな姿が行間から垣間見える。
	K1-914.6「昨日の鎌倉」	表題のとおり、かつての鎌倉の風物や季節

	木村彦三郎・大藤ゆき・著 （「鎌倉朝日」平成4年～平成9年連載 の新聞切り抜き）	行事、谷戸や鎌倉石、伝承や仏像などを 思い出をまじえ、学識豊かに叙述している。 季節ごと、場所ごとの折り目の中で暮らす、 民俗的世界の持つ豊かさが伝わる。
育つ	K1-386.1「子どもの四季―鎌倉風物詩―」 大藤ゆき・著 （新樹社 1994年）	月ごとの子供の行事を中心に、幼な子が 成長する過程を、民俗的世界との関連で 描く。四季ごとに繰り返される年中行事が 子どもたちの心の豊かさを育ててゆくこと を教えられる。同じ著者の「児やらい」（岩崎 美術社1968年）も民俗の世界で育つ子供 を描いた定評ある本。
民俗信仰	K1-387「道ばたの信仰―鎌倉の庚申塔―」 木村彦三郎・著 （鎌倉市教育委員会・発行 昭和48年）	道のほとりに静かに立つ庚申塔をくまなく 調査し、かつて村の境にあった庚申塚から 昔の往来の道筋や庶民の信仰の形を明ら かにする。 また、同じ著者による「鎌倉の野仏」（1987年） も、地蔵・馬頭観音・道祖神・不動尊・諏訪社・ 白山社など、市内にある道端の塔碑や小祠類 を丹念に調査したもの。前近代における人々 の祈りの形がそこから見え隠れする。
農業	K1-611.6「鎌倉市農協十年史」 （鎌倉市農業協同組合・発行 昭和55年）	昭和44年に大船・深沢・旧鎌倉の市内三 農協が合併し、新たに鎌倉市農協として 出発し十年目に刊行された記念誌。 都市型農業の苦労や実際の生産者の話、 農業における女性の力などが語られる。
	K1-611.6「大船農業協同組合」 大船農業協同組合史編纂委員会・編 （大船農業協同組合・発行 昭和43年）	大船農協創立二十周年の記念誌。市民の 「食」を維持する農業がどのように守り育て られたかを知らないことは、大地を知らずに 自分の足だけで歩いていると錯覚するような ものかもしれない。
	K1-611.6「写真集 谷戸の追憶」 （鎌倉市農業協同組合・発行 平成元年）	農協二十周年を記念して出版された写真集。 明治・大正・昭和の鎌倉の農村地帯の風景 や人々の暮らしが一目でわかる。
	K1-318.5「かまくらっ子」 昭和57年4号（鎌倉の農業） 昭和62年18号（鎌倉の農業） 平成3年28号（鎌倉の畜産業） 平成5年35号（園芸農家） 平成6年37号（いちご）	「広報かまくら」の小学生版だが、子どもたち が実際に取材に訪れ、農家の話を聞くという スタイルをとっている。鎌倉で採れる野菜やら 生産量、農家の作業の基本的理解が得られ る。最新のデータもわかる。
漁業	K1-382「江ノ島民俗誌 伊勢吉漁師聞書― 鎌倉腰越の民俗―」 （神奈川県民俗シリーズ1） （神奈川県教育委員会 昭和36年）	漁業や漁民については大藤ゆき『鎌倉の民 俗』や木村彦三郎『としよりのはなし』にも詳し いが、それ以外のものとしてはこの本が詳し い。後者「伊勢吉漁師聞書」は土屋秀四郎氏 が入院先の病院で同室にいた腰越の漁師 小林伊勢吉氏から聞いたもので、昭和20年 当時の漁撈の姿―魚の話から道具、海上 生活、信仰や伝承など―をいきいきととらえ た優れた業績となっている。
	K1-071「鎌倉朝日」平成14年1月～15年12月	「鎌倉朝日」に連載されていた相模湾で獲れる

	寺崎誠「相模湾の幸」 (鎌倉朝日新聞社)	魚介類についての解説。たとえば伊勢海老、ヒラメ、サザエ、鯉…などなどの習性や料理、歴史などが語られる。魚に国境はないので鎌倉に限定せず、相模湾の魚についての解説として挙げておく。魚の図もあり、わかりやすい。
	K0-051「かながわ風土記」155、156号 坂本正行「鎌倉鯉」 (丸井図書 平成2年)	古くから人くちに鎌倉といえば鯉とくるくらいに有名な魚だが、古い文献に出てくる鯉の漁や生態を引用を交えて記述している。
	K1-318.5「かまくらっ子」 平成61年15号(鎌倉の漁業)、 平成3年30号(和賀江島) 平成4年31号(わかめの養殖) 平成4年32号(シラス漁) 平成4年33号(さしあみ漁) 平成5年35号(タコ漁) 平成5年36号(はえなわ漁) 平成6年37号(ノリの養殖) 平成8年45号(鎌倉で漁業をするひと)	市広報の小学生版として出されている「かまくらっ子」に連載されたもの。鎌倉の漁業に関する記事はわかりやすく、大人が読んでも鎌倉の漁業を知るためにはよい。漁法や収穫量、魚を採るための作業などが語られ、現在の鎌倉の漁業についてひと通りの理解が得られる。
手仕事	K1-051「かまくら春秋」 1998年1月号～3月号 (かまくら春秋社)	鎌倉彫、表具・木工・畳・板金・蕎麦・煎餅・和菓子・靴・豆腐・造園などの、各職人の声を伝えている。
伝統産業	K1-318.5「かまくらっ子」 昭和58年5号(鎌倉彫) 昭和63年19号(鎌倉彫) 平成4年32号(刀鍛冶) 平成6年39号(友禅染) 平成7年40号(鎌倉彫)	鎌倉を代表する工芸である鎌倉彫をはじめ、意外と知られていない伝統工芸の数々が紹介されている。
老舗	K1-673.7「神奈川の老舗」 田島武・著 (武蔵野文庫 昭和44年)	神奈川県内の老舗全般について紹介しているが、鎌倉については「鎌倉ハム」や「力餅屋」「豊島屋」「博古堂」「正宗美術工芸所」などの創業以来の歴史が手際よく紹介されている。なお、明治末の鎌倉みやげに関しては、大橋良平「現在之鎌倉」(明治45年)10～11ページに記載がある。
医療	K1-490.6「鎌倉市医師会史」 (鎌倉市医師会・発行 昭和37年)	明治中期から昭和30年代までの鎌倉の医療事情がわかる資料集的色彩の濃い医師会史。
	K1-490「鎌倉市医師会誌 神庫 第35号 —鎌倉医師会創立百周年記念号—」 鎌倉市医師会広報委員会・編 (鎌倉市医師会・発行 平成4年)	「医師会史」が「正史」だとすると、医師会百周年を機に出された本誌は「読んで楽しめる」雑誌として編集されている。寄稿者も医師だけでなく、鎌倉在住の多くの文化人たち—永井路子・尾崎左永子・三木卓・横山隆一—などが文章を寄せている。他に女医の養老静江・後藤久子、助産婦の丸エキさんによる座談も収める。
	K1-498.1「清川病院史」 (医療法人養生院 清川病院・発行 平成5年)	明治中期に鎌倉で最も古い病院として開業した「鎌倉養生院」(現・清川病院)の90年あまりの歴史。清川氏二代にわたる私立病院の歴史だが、同時に明治・大正・昭和

生活案内	<p>289.1「いのちの始まり いのちの終わり —助産婦二代の記—」 小峰豊子・著 (かまくら春秋社 平成19年)</p> <p>K1-318.5「市民便利帳 かまくらガイド」 (鎌倉市・湘南リビング新聞社 2009年)</p>	<p>の鎌倉地域の医療事情の歴史がよくわかる。作家の島木健作や詩人の中原中也もこの「鎌倉養生院」で亡くなった。</p> <p>鎌倉の助産婦さんとしては、その開拓的な仕事も含め丸エキさんが有名だが、残念ながらまとまった本はない。この本の著者も助産婦として命の誕生に立ち会い、その変遷を語る。</p> <p>子育て、高齢者福祉、障がい者福祉、母子父子家庭、害虫、耐震診断、ごみ、戸籍・住民登録、公共施設の利用案内など、生活する上での手続きや場所がわかる。病院・診療所案内もついている。</p>
------	---	--

【社史】

項目	図書	内容
電気	<p>K1-335.4「三菱電機 鎌倉製作所二十五年史」 三菱電機株式会社鎌倉製作所史 編纂委員会・編 (三菱電機鎌倉製作所・発行 昭和62年)</p>	<p>昭和37年当地において操業を開始した三菱電機鎌倉製作所の記念誌。防衛事業、計算機事業、宇宙事業を三本柱とする事業内容とその歴史が語られる。他に『三菱電機社史 創立60周年』(昭和57年)もある。</p>
映画	<p>K1-770.6「松竹百年史」全三巻 (松竹株式会社・発行 平成8年)</p>	<p>明治28年に操業された松竹の百年を豊富な写真と編年体の事業概要で綴ったもの。昭和9年に蒲田から大船に撮影所が移転して一時代を築いた松竹映画は、一映画会社にとどまらず、日本の映画史の大きな歩みを語っている。「本史」「演劇資料」「映像資料」の三冊から成る。</p> <p>(鎌倉にある企業・事業所としては資生堂や武田薬品工業などもあるが、鎌倉とのかかわりを中心に社史を上梓したところに限定した。)</p>
百貨店	<p>地下K1-673.1「鎌倉と三越」 (日比翁助・私家版・大正11年) (K1-361.7「鎌倉と海水浴」(コレクション・モダン都市文化54)原田香織・編(ゆまに書房 2009年)に復刻され収められた。)</p>	<p>明治43年から45年にかけて三越呉服店は「全店員慰安会」を年一回開催した。今風に言えば社内運動会のようなものだが、規模が半端ではなかった。ほとんど鎌倉を貸し切るかのような勢いで一大祭典を繰り広げ、鎌倉在住の人々の耳目を驚かせた。三越呉服店は明治37年、三井呉服店改め我が国で初めてのデパートとなったが、日比翁助専務は欧米旅行の見聞から、休日のない商法に一石を投ずるため11月3日を臨時休業日とし、「全店員慰安会」を開催することとなった。これはその全記録。</p>

【地形・地名】

項目	図書	内容
谷戸	<p>K1-291.3「鎌倉 谷戸の記録」上・下 鎌倉市中央図書館近代史資料室・</p>	<p>鎌倉の地形を特徴づける「谷戸」について実地調査をふまえ、谷戸ごとに写真と図面、来歴を</p>

地名	<p>CPCの会・編 (鎌倉市中央図書館・発行 平成20年)</p> <p>K1-291.3「鎌倉の地名由来辞典」 三浦勝男・編 (東京堂出版 2005年)</p>	<p>記述したもの。宅地造成により元の姿を変えたものも含め、四年の歳月をかけて作られた貴重な調査記録。</p> <p>鎌倉の地名の由来についてその出典ともども詳述している。鎌倉の歴史研究では定評ある著者による、信頼度の高い一書。</p>
----	--	--

【地図】

項目	図書	内容
中世歴史地図	<p>K1-291.3「中世鎌倉歴史地図」 阿部正道・安田三郎著 (雑誌『鎌倉市民』第103～129号)</p>	<p>かつて雑誌『鎌倉市民』に連載されたものをまとめた。各地域別に中世鎌倉の遺跡や道はこうであったろうと地図上に復元され、寺や武士の邸宅の説明が付されている。</p>
昭和初期商工地図	<p>K0-291.0「昭和初期 日本商工地図集成—東京・神奈川・千葉・埼玉—」 (柏書房 1987年)</p>	<p>昭和初期の鎌倉町の店の地図がわかる本。昭和8年刊行の復刻版だが、当時の鎌倉駅を中心に街路沿いに軒ごとの店が地図上に図示されている。ちなみに、当時の鎌倉町の人口は三万人弱であり、腰越町と合併して鎌倉市となったのは1939(昭和14)年であった。</p>

【鎌倉の歴史と地誌】

項目	図書	内容
史蹟	<p>K1-291.3「鎌倉の史蹟」 三浦勝男・著 (かまくら春秋社 昭和58年)</p> <p>K1-291.3「鎌倉史蹟事典」 奥富敬之・著 (新人物往来社 1999年)</p> <p>K1-291.3「鎌倉史蹟めぐりの会記録」 沢寿郎・編 (鎌倉文化研究会・発行 昭和47年)</p> <p>K1-291.3「鎌倉の碑めぐり」 稲葉一彦・著 (表現社 昭和57年)</p>	<p>鎌倉の代表的な史蹟—社寺・切り通し・やぐら群・海浜・山城について詳述したもの。長年にわたる丹念な資料調査により文献を熟知した著者による最も信頼できる一書。</p> <p>鎌倉の史蹟について五十音順で引ける史蹟解説辞典。出典も明記され、便利なハンドブック。</p> <p>昭和7年、亀田輝時氏を中心に同行の士が延べ95回にわたり行なった鎌倉市内の史蹟調査の記録。今日のように史蹟周辺が整備されておらず、或る時は草をかき分けるように丹念に調査し、記録したもので、今日でもなお価値を失わない。</p> <p>鎌倉市内にある史蹟の碑について、一点ごとに碑文を収録し、歴史的由来を解説したもの。とかく見過ごしてしまいやすい石碑を読解すると、平板な風景も人馬轟く一編の歴史舞台と化す。</p>
歴史案内	<p>K1-291.3「鎌倉大観」 佐藤善次郎・著 (松林堂書店 明治35年)</p> <p>K1-291.3「かまくら」 大森金五郎・著 (明治40年)</p>	<p>鎌倉の案内書のスタイルを作りだしたガイドブックの嚆矢となる本。著者の佐藤善次郎は神奈川県師範学校教諭。</p> <p>鎌倉時代史の研究者として有名な著者が鎌倉の歴史地理について著した一書で、鎌倉研究の原典とも言える本。</p>

K1-291.3「鎌倉の歴史と美術」

渋江二郎・著
(有隣堂 昭和47年)

美術史家として東国の彫刻史に詳しく、長年鎌倉国宝館館長を務めた著者が折にふれ書いた、鎌倉の歴史と美術への愛情と鋭い審美眼に支えられた案内。生前その人柄を愛された著者の遺稿集。

K1-210.4「鎌倉・歴史と美術」

貫達人・三山進・編
(至文堂 昭和41年)

鎌倉の歴史から民俗、社寺の美術、文学など全般にわたる案内書。永井路子、大三輪龍彦、白井永二、石井良助、佐藤昭夫、前田元重など斯界の定評ある著者たちによる案内。「鎌倉の史実と虚構」(三浦勝男)など伝説にも言及している。

K1-291.3「鎌倉歴史散歩」

大仏次郎・編
(河出書房新社 昭和35年)

鎌倉の各地域ごとの案内だが、貫達人、三山進、渋江二郎、沢寿郎、川副武胤、赤星直忠、安田三郎、服部正道など、当代きっての著者たちが、その歴史や美術を案内している。

K1-291.3「鎌倉」

三山進・著
(学生社 昭和46年)

日本中世彫刻史家による鎌倉の歴史案内。古代から江戸までを収めるが、美術史家としての眼が随所に生きている。著者は鎌倉国宝館勤務を経て跡見学園女子大学教授となり、それまで奈良・京都に比べ冷遇されてきた鎌倉地方美術を復権させた。

K1-291.3「鎌倉古寺巡礼」

三山進・著
(実業之日本社 昭和54年)

美術史家として定評ある著者による鎌倉の社寺案内。ただし堅苦しい文章ではなく、随想風に、時に空想なども交えながらいろいろな角度から鎌倉の古寺を案内している。

K1-291.3「鎌倉文化財散歩」

貫達人・編
(学生社 昭和47年)

小町・大町・材木座…等の地域ごとの鎌倉の歴史と文化の案内書。貫達人、清水真澄、三浦勝男など資料にも熟達し実地に歩いて調査もしている鎌倉の歴史の専門家による文化財案内。

K1-914.6「鎌倉幻想行」

村上光彦・著
(朝日新聞社 1986年)

鎌倉のさりげない洞窟や迷路のような道を手がかりに、パシュールなどを援用しながら地形と人間の想像力とのかかわりを読み解いていく。著者はフランス文学者だが鎌倉に詳しく、大仏次郎研究会も主宰する才能豊かな人。他に『鎌倉百八箇所』(1989年)などもある。

K1-291.3「かまくら子ども風土記」

鎌倉市教育センター・編
(鎌倉市教育委員会・発行 平成21年)

古代からの鎌倉の歴史の概説や各地域ごとの歴史、行事、人口、産業、史跡めぐりなど、これ一冊で大概の事はわかる。1957年に最初に刊行された小学生向けの副読本ながら改訂を重ね、大人が読んでも十分に楽しめる。

K1-054「鎌倉市民」1961.1～4所収

澤寿郎「鎌倉に関する本の話」
(鎌倉市民社・発行 1960～1977)

江戸から昭和30年代に鎌倉で刊行された鎌倉の案内記・地誌について解説したもの。明治初期の「鎌倉江島名所案内」、明治末

考古学

K1-210.2「中世鎌倉の発掘」

大三輪龍彦・編
(有隣堂 昭和58年)

の「鎌倉大観」「現在の鎌倉」、大正の「鎌倉名勝誌」から昭和30年代の「かまくら子ども風土記」に至るまで、長年の収集の上に立ち簡潔に解説している。

昭和41年以降、鎌倉市内で行われた主な発掘調査の成果をふまえ、気鋭の学者・研究者による座談会をまとめたもの。永井路子、石井進、網野善彦、福田豊彦、吉田章一郎、貫達人、三山進、三浦勝男らが参加。

K1-210.2「掘り出された鎌倉—新発見の鎌倉遺跡と遺物展・図録—」

大三輪龍彦・監修
鎌倉考古学研究所・編
(有隣堂 昭和56年)

発掘調査をふまえて古代から近世にかけての鎌倉の生活を復元している。中でも中世鎌倉の遺品類—建物の遺構・食生活・調度品・灯火・装身具・陶磁器・遊具・信仰—から当時の生活の具体相を遺物の写真ともどもわかりやすく述べている。わずか60ページほどの冊子ながら、内容が優れている。

K1-210.2「やぐらの話」

赤星直忠・著
(鎌倉市教育委員会 1960年)

鎌倉の山野に散在してある「やぐら」は鎌倉特有のもので、中世の墓窟だが、その「やぐら」について小学生にもわかるように易しく書かれた案内書。

寺社

K1-175.9「御鎮座八百年 鶴岡八幡宮」

(鶴岡八幡宮 平成3年)

神社仏閣の歴史については「鎌倉市史・社寺編」が詳しいが、それ以外の美術・歴史の個別の案内として以下紹介する。

鶴岡八幡宮は鎌倉の顔とも言えるが、この本は八百年を記念して出されたもの。多くの図版により古神宝類が紹介され、貫達人・三浦勝男・大三輪龍彦各氏によりその歴史が語られる。

なお、鶴岡八幡宮の歴史をより深く知りたい場合は、貫達人「鶴岡八幡宮寺—鎌倉の廃寺」(有隣新書 平成8年)が、その創建から明治の神仏分離までを描き、わかりやすい。

K1-188.8「巨福山 建長寺」

(建長寺 昭和52年)

鎌倉寺院の代表として建長・円覚寺を挙げることができるが、この本は建長寺の開山700年を記念して出されたもの。建長寺の伽藍・塔頭や彫刻・絵画・墨籍・工芸品など寺宝の紹介や寺の歴史、開山大覚禪師の人となりなどがわかりやすく書かれている。専門家向けには大部の「建長寺史」もあるが一般向けにはこれで十分かと思う。

K1-188.8「瑞鹿山 円覚寺」

(円覚寺 昭和60年)

専門家向けには「円覚寺史」という900ページにのぼる本があるが、円覚寺の寺宝や歴史を知る向きにはこの本がよい。開山700年を記念して出された本で図版もありわかりやすい。

K1-188.8「松岡山 東慶寺」

(東慶寺 昭和51年)

「縁切り寺」として有名な東慶寺の寺の歴史や彫刻・工芸・絵画など美術を知るためには図版も多く手頃であろう。

なお、「駆込寺」「縁切り寺」としての側面を扱った研究書としては、寺の住職であった

<p>歴史全般</p>	<p>K1-210.1「鎌倉市史」総説編／近代通史編／考古編／社寺編 鎌倉市史編纂委員会・編 (吉川弘文館 昭和34年)</p>	<p>井上禪定氏による「駆込寺 東慶寺史」がやはり基本文献として重要である。</p> <p>(鎌倉市内には他にも日蓮宗をはじめ多くの寺社があるが、あまりに数が多いため、「歴史案内」で紹介した「古寺巡礼」の類の本や「鎌倉市史」の「社寺編」に譲りたい。)</p> <p>鎌倉の歴史のことを調べようとする人は必ず手に取り調べなくてはならないほど定評ある本で、歴史学会を代表する研究者の手になる。他に史料編・近世史料編・近代資料編・近世近代紀行地誌編などがある。</p>
<p>政治史</p>	<p>K1-318.4「鎌倉議会史」(明治～昭和44年) 鎌倉市議会史編さん委員会・編 (鎌倉市議会 昭和44年) K1-318.4「鎌倉議会史」(昭和43～平成元年) 鎌倉市議会史編さん委員会・編 (鎌倉市議会 平成4年)</p>	<p>鎌倉の近現代史としては、「鎌倉市史・近代通史編」(平成6年)があるが、昭和以降の歴史についてはやはり議会史が詳しく、基本史料と言えよう。時々の時代のかかえていた社会的諸問題とその対応がよくわかる。問題を解決すべき制度形成の合意の型や、時に「政争」に見られる集団形成の型、或いは、制度的な意見集約の場としての議会と社会的問題群との「乖離」による自発的市民運動の発生など、社会の動態の教科書と言える。</p>
<p>事典</p>	<p>K1-031「鎌倉事典」 白井永二・編 (東京堂出版 平成4年) K1-185.9「鎌倉廃寺事典」 貫達人・川副武胤・著 (有隣堂 昭和55年)</p>	<p>歴史・人名・地名・社寺・文化財など、鎌倉に関する事項が五十音順に配列され、参考文献もあげてある。鎌倉のことに興味ある人は一冊あると重宝する事典。</p> <p>かつて鎌倉には現在よりはるかに多い社寺があったが、時の流れや栄枯盛衰により廃寺となった社寺が少なからずあった。本書は失われた社寺の姿を丹念に資料を索捜する中から浮かび上がらせた労作。</p>
<p>年表</p>	<p>K1-210.1「図説鎌倉年表」 (鎌倉市・発行 平成元年) K1-210.6「鎌倉近現代史年表稿—明治・大正・昭和・平成—」 小坂宣雄・編著 (私家版 2010年6月)</p>	<p>室町時代末期の1532年から1984(昭和59)年までの450年間の鎌倉地方で起こったことの詳細な年表。鎌倉市制五十周年を記念して出版されたもので、事項の出典や関連する写真も多数収められている。</p> <p>明治から平成までの近代以降の年表で、時々の資料にあたりよく調べている。特に人の生没年や地域で開催された行事などももきちんと調べるなど、熱意と努力なしには達成できなかった年表といえる。2001(平成13)年までを収めた、全318頁の労作である。</p>
<p>写真集</p>	<p>K1-210.2「図説鎌倉回顧」 (鎌倉市・発行 昭和44年)</p>	<p>明治・大正・昭和の鎌倉の写真集。他に大仏次郎・小林秀雄・有島生馬など鎌倉在住の文化人24名による随想や明治以降の略年表からなっている。鎌倉市制三十周年の記念出版。</p>

【鎌倉の近世地誌】

項目	図書	内容
鎌倉の地誌	K0-291.3「新編相模国風土記稿」 (名著出版 昭和47年)	相模九郡の地理誌で、天保元年(1830)に着手され天保12年に脱稿した。鎌倉関係は第四集に収められている。鶴岡にはじまり、山之内村・雪ノ下村・大町村・小町村・扇ヶ谷村・二階堂村・西御門村・十二所村・浄妙寺村・乱橋村・材木座村・長谷村・坂之下村・極楽寺村・山崎村・小袋谷村・大船村・岩瀬村・今泉村の順に地誌や社寺を紹介している。記録・文書の引用が非常に多く、地誌としてばかりでなく歴史研究としても重要な文献である。
	K1-291.3「大日本地誌体系 新編鎌倉志・鎌倉攬勝考」 (雄山閣 昭和33年)	「新編鎌倉志」は貞享二年(1685)刊。徳川光圀が臣下に命じ、江ノ島・葉山・金沢を含む鎌倉一帯の地名・旧跡・社寺の由緒沿革を調査・編纂させたもの。多くの史料を渉猟し、絵図も挿入するなど、鎌倉に関する基本文献である。 「鎌倉攬勝考」は文政十二年(1829)に完成した地誌。総説・鶴岡・仏利・堂宇・第址・墳墓・古蹟・域外に分けて記述している。総説には各村・切通・十橋・十井・五水・山川・地名・谷・物産を収める。仏利・堂宇には各社寺や観音堂等を、第址・墳墓・古蹟には旧跡史跡等を、域外には津村・腰越・江の島等を収め、その由緒沿革を述べている。

【文化財・芸術】

項目	図書	内容
古美術全般	K1-709.1「鎌倉国宝館図録」 絵巻／肖像画／肖像彫刻／ 水墨画／石塔／仏像／史跡／ 中世建築／古絵図／鎌倉彫／ 中世出土遺品／墨籍／板碑／ 石仏・宝塔／五輪塔／宝篋印塔 彫刻など全般にわたる。 (鎌倉国宝館)	絵画・彫刻・絵巻・書など鎌倉地方の美術・工芸品等の文化財すべてにわたり写真と解説で構成されている図録。1953(昭和28)年の第一集から、1999(平成11)年の第三十八集まで刊行されている。解説は国宝館学芸員や斯界の権威により執筆されており、鎌倉の美術品に関心のある人は参照すべき本。
	K1-709.2「鎌倉の美術」 (朝日新聞社・編・発行 昭和33年)	従来の京都・奈良を中心とした美術書に対し、鎌倉の美術を集大成した初めての出版物。建築・彫刻・絵画・工芸・銅鐘・石造物・書など全般にわたり写真と解説により構成。
建築	K1-521「かたちの美—やさしい古建築の 味わい方—」 山形雄三・監修 (潮音会・発行 1994年)	鎌倉の社寺建築の案内で、社寺の建築を通して鎌倉が楽しめるようにと書かれた本、屋根や柱、細部にわたる意匠から、山門や仏殿を読み解くもので、これを読むことで社寺の見方が一層深まる案内書。山形雄三氏は鎌倉市の社会教育課長を長年務め、その後、長谷寺の文化財室長となった人

		で、古社寺に詳しい。
	K1-521「館のある街—湘南散歩—」 (神奈川新聞連載記事のスクラップ 1988年)	鎌倉に限らず広く湘南地方に点在する洋館など歴史的建築物を紹介しているコラム記事。旧華頂宮邸、鎌倉文学館(旧前田邸)、浜口邸、長谷子ども会館(旧諸戸邸)、旧安保小児科医院、ハリス記念鎌倉幼稚園、ハリス記念鎌倉教会、かいひん荘鎌倉、望洋楼、篠田邸、須藤邸、大船軒、旧パヴロバ邸…など、鎌倉を代表する洋風建築がその歴史とともに紹介されている。ただし、すでに姿を消している建物もある。
彫刻	K1-712.8「高田博厚作品」 高田博厚・著 (求龍堂 1978年)	現代日本を代表する彫刻家であり、晩年を鎌倉で過ごした高田博厚の作品集。戦前、パリに長らく住み、ロマン・ロランらとも交友があり、彫刻以外のエッセイでも人を思索へと誘い、魅了してやまない文人でもあった。現代日本を覆う泡のような出版物とは一線を画す、深い沈潜へといざなう優れた思索者。興味のある人は「高田博厚著作集」全四巻(朝日新聞社 1985年)をひも解かれない。
工芸	K1-713「鎌倉彫—背景と技術—」 神奈川県工芸指導所鎌倉支所・編 (神奈川県工芸指導所鎌倉支所 昭和47年)	100ページほどの冊子ながら、鎌倉彫の歴史から、鎌倉彫の彫刻技術、漆塗装の概要に到るまで丁寧に説明しており、鎌倉彫のことはこれ一冊で大体のことはわかる。
	K1-713「鎌倉彫」 灰野昭郎・著 (京都書院 昭和52年)	鎌倉彫研究の第一人者による鎌倉彫研究の集大成とも言える本。写真図版多数と鎌倉彫の概説、作品解題からなる。著者は鎌倉国宝館学芸員を長く務めたあと、京都国立博物館へ移った工芸の専門家として定評ある人。
	K1-713「鎌倉彫後藤家四代」 後藤俊太郎・圭子・編 (かまくら春秋 平成9年)	鎌倉で鎌倉彫というこの人、というくらいに鎌倉彫の歴史と伝統を担っている後藤家四代の歴史を語ったもの。仏師から鎌倉彫への推移や歴史、回想が語られる。美術史家の三山進と灰野昭郎が文章を寄せている。
仏像	K1-718.5「鎌倉大仏と阿弥陀信仰—鎌倉大仏建立七百五十年記念特別展—」 (神奈川県立金沢文庫・編発行 2002年)	鶴岡八幡宮とともに鎌倉の象徴的な存在として親しまれている鎌倉大仏について、その信仰の文脈や造立過程、江戸期以降の「大仏詣で」に至るまでを多くの図版とともに紹介している。清水真澄『鎌倉大仏—東国文化の謎—』(有隣堂)や馬淵和雄『鎌倉大仏の中世史』(新人物往来社)とともに基本文献と言える。
	K1-718.5「大仏」(えのしまかまくら観光ニュース別冊) 安田三郎・著 (江ノ島鎌倉観光株式会社観光部開発課 昭和32年)	13ページほどの小冊子ながら、「誰が・何のために」「いつ出来たのか」「どの様にして造られた」「大仏の寸法について」「なぜ此地が選ばれた」「災害の記録」「お寺の変遷」…など要領よく史的事実に即してまとめられている。

絵画	<p>K1-718「鎌倉 み仏へのいざない」 安田三郎・著 私のかまくら編集室・編 (アルファ 1998年) (「私のかまくら」増刊号 第242号)</p>	<p>著者は長年 鎌倉国宝館に勤務し、鎌倉の歴史・仏像に詳しく、鎌倉地域の人・風景・仏像など、多くの写真を残し、没後、中央図書館近代史資料室に寄贈した。 この本は、鎌倉の代表的な仏像の写真とその歴史的由来について書いているが、釈迦・菩薩・如来・観音・明王など、仏像の「形態学」(イコノロジー)の解説も含んでおり、知らず知らずのうちに仏像の見方がわかるようになる。鎌倉の仏像を読み解くため、著者は独学で梵字も勉強した努力の人。</p>
	<p>K1-718「鎌倉のみほとけ」第1～4集、別巻 写真=湯川晃敏、解説=三浦勝男 (かまくら春秋社 昭和50～52年)</p>	<p>近年の仏像ブームが始まるずっと以前に鎌倉地方の各社寺の仏像を写真に収め、来歴等の解説を加えたもの。カメラアングルにより写し出された仏像の美しさや思わぬ表情を伝える。</p>
	<p>K1-721.9「鍋木清方文集」全八巻 鍋木清方・著 山田肇・編 (白鳳社 昭和54年)</p>	<p>昭和21年から昭和46年93歳で世を去るまでの晩年を鎌倉で過ごした鍋木清方は、下町をこよなく愛し、日常庶民の暮らしに関心を持ち続けた日本画家であった。明治・大正の風物人情を哀惜する清方は、それを画に残すだけでなく、多くの文章にも記した名随筆家でもあった。大作や大展覧会ではなく、日常市井の暮らしぶりを記す文章には、清方のその生き方や姿勢がにじみ出ている。 なお、旧鍋木邸跡に鎌倉市鍋木清方記念美術館が平成10年に開館し、毎年企画展を催し、その図録も多数ある。</p>
	<p>K1-721.9「小倉遊亀 画室のうちそと」 小倉遊亀・著 聞き手・小川津根子 (読売新聞社 昭和59年)</p>	<p>2000年に105歳で亡くなった女流日本画家小倉遊亀の半生をたどる聞き書き集。若い頃、女学校などで教職生活を送るかたわら、着物の模様を描く仕事もこなし母親を養い続けた。鎌倉に住むようになったのは1938年。鎌倉市の名誉市民にもなり、「鎌倉市名誉市民 小倉遊亀展」(平成9年)もある。</p>
	<p>K1-721.9「平山郁夫 悠久の流れの中に」 平山郁夫・著 (日本図書センター 1997年)</p>	<p>2009年惜しくも亡くなった平山郁夫が自ら記した半生の記。広島での被爆体験や画業のこと、仏教伝来をめぐるシルクロードの旅などのことが語られる。</p>

【郷土史この人】

項目	図書	内容
木村彦三郎	<p>K1-914.6キ「鎌倉記憶帖」「続・鎌倉記憶帖」 木村彦三郎・著 (正編=鎌倉郷土史料研究会・発行 1986年 (続編=鎌倉郷土史料研究会・発行 1994年)</p>	<p>鎌倉の郷土史を調べる人なら必ず参照すべき本。大正以降の地誌・風物・生業などの生活のことから、野辺の石仏や文学者に至るまで生き生きと叙述され、当時の有り様が手に取るようにわかる。折に触れ書かれたものながら、資料への熟達と片片たる物事への興味、人々の生活への深い関心なしには生まれないすぐれた叙述となっている。</p>

		<p>鎌倉の歴史についての生き字引のような人であったと同時に、「権力なき知性が団結なき闘志をもって」单身自らの人生と世界を切り開いてきた者のみがかもつ批判的精神をも併せ持つ人であった。</p> <p>平成2年に中央図書館で開催された際の展示解説。明治以降鎌倉の近代化に尽力した人々の略歴が記されている。海水浴を奨励した長與専歳や初めて牛乳店を開き牧場も経営した柴崎梅吉をはじめ、今日の鎌倉の礎を築いた多士済々な人々が紹介されている。</p>
	<p>K1-210.6「鎌倉の開化と人物展」展示解説 木村彦三郎・著 (鎌倉市中央図書館 平成2年)</p>	
	<p>K1-910.26「柳屋と独歩・蘆花」 木村彦三郎・著 (石渡喜市(柳屋)・発行 1961年)</p>	<p>逗子市桜山の柳屋に住んでいた国木田独歩と徳富蘆花の日常生活に重点を置きながら明治30年前後の逗子を描いている。明治30年から34年まで柳屋にいた蘆花は「自然と人生」「思い出の記」などをここで執筆し、独歩もまた人生の転機となる結婚生活をここで過ごした。</p>
	<p>K1-910.26「長谷観音ゆかりの文学者・1」 木村彦三郎・著 (長谷寺 1956年)</p>	<p>明治・大正期に長谷観音周辺に住んだ三人の文学者高山樗牛・国木田独歩・生田長江の生涯と鎌倉とのかかわりを描き出している。樗牛は短い生涯の最後を長谷寺境内の貸家に住んで仏教研究に打ち込み、独歩は長谷寺近くの御霊神社境内の借家を借り、交友を楽しみ、安定し充実した作品を生んだ時期を過ごした。大正末から昭和初期にかけて長谷稲瀬川に住んだ長江は、文芸評論家として佐藤春夫・江口渙・高群逸枝などの門人を育て、他方で郷土史家であり義兄でもある亀田輝時の雑誌「鎌倉」創刊号(大正15年4月)に詩を載せるなどした。</p>
<p>沢寿郎</p>	<p>K1-291.3「つれづれの鎌倉」 沢寿郎・著 (かまくら春秋社 昭和51年) 「知られざる鎌倉」 沢寿郎・著 (鎌倉朝日 昭和60年)</p>	<p>木村彦三郎氏とともに鎌倉郷土史研究の双壁とも言える大御所。大町や小町など各地域ごとの歴史や地誌を、わかりやすく書いている。歴史や古文書、古絵図など長年の蓄積の上に立ち、いろいろなエピソードとともに歴史の面白さを伝えている。著者には他にも古絵図の復刻や古写真の編集、鎌倉の歴史をめぐる雑誌論文など鎌倉研究の宝庫ともいえる多くの著述がある。他にも、「源頼朝と鎌倉幕府の組織」(R210「日本史に出てくる組織と制度」新人物往来社2010年所収)などもある。</p>
	<p>K1-388.1「かまくらむかしばなし」 沢寿郎・著 (かまくら春秋社 昭和50年)</p>	<p>鎌倉地方に伝わる昔話・伝説を集めたもの。「楽しいはなし」「こわいはなし」「ちよっぴり悲しいはなし」「ちよっぴりたためになるはなし」のほかに実朝や公暁、富士の巻狩などの史実にまつわる話もある。</p>
	<p>K1-291.3「鎌倉史跡見学」 沢寿郎・著</p>	<p>岩波ジュニア新書の一冊として中学生向けに書かれた、鎌倉幕府の成り立ちから室町</p>

	(岩波書店 1979年)	時代に至る歴史。史料研究の片鱗を覗かせながら、確かな史眼のもと、大人の鑑賞にも十分耐える。鎌倉散策の際に手元にあると理解が深まる。
金子晋	K1-210.6「鎌倉のなかの明治・大正・昭和 沢寿郎・文 那須良輔・題字と絵 (豊島屋 昭和58年初版 平成21年復刻版)	明治以降の鎌倉の風物を1ページ1テーマで解説している。段葛・海岸への道・別荘・人力車自転車・松のある風景・鎌倉劇場・白切符青切符・鎌倉能楽堂・自動車・遊覧馬車・外人客・海浜博覧会・洋食屋・提灯・市民座…等々興味深い22のテーマが積年の蘊蓄を傾けて語られている。小冊子ながら那須良輔の絵とともに楽しめる。
	K1-910.29「鎌倉再見—古都を愛した文人たち—」 金子晋・著 (読売新聞社 昭和48年)	著者の職業は古道具商だが、作家里見弴の知遇を得、以後私淑し、鎌倉に住む多くの文人に知遇を得るようになった。そうした作家たちを知る著者による鎌倉文人の案内記。大町・小町・長谷・坂の下など地域ごとにゆかりの文人を紹介している。里見弴が序文を寄せている。
	K1-910.26「江ノ電沿線文学散歩」 金子晋・著 (江ノ電沿線新聞社 昭和54年)	鎌倉のみならず江ノ電沿線の藤沢までも視野に入れて、ゆかりの作家や作品を紹介したもの。立原正秋が序文を寄せている。
	K1-910.26カ「江ノ電沿線今昔漫筆」 金子晋・著 (江ノ電沿線新聞社 昭和57年)	鎌倉と藤沢の各地域ごとに昭和初年の少年時代の思い出や当時の風物を織り込みながら説き語りのように叙述し、一幅の絵を見るように時代像が思い浮かべられる。澤寿郎が序文を寄せている。
	K1-910.26カ「私記 鎌倉回想五十年」 金子晋・著 (かまくら春秋社 昭和51年)	関東大震災から昭和四十年代に至るまでの著者の自伝的回想。貧しい中に育ち、苦節の青年時代をおくりながらも、誠実に生き、その人柄を多くの作家から愛された著者の、自伝にとどまらない鎌倉の風物を活写した回想録。鎌倉に水道が引かれた頃の話や鎌倉カーニバルの話をはじめ興味がつきない。立原正秋が序文を寄せている。
清田昌弘	K1-291.3「だれも書かなかった鎌倉」 金子晋・著 (講談社 1983年)	かつてあった風物、人、景観など古き鎌倉を実際に生き、知っていた人による最後の案内記とも言える。したがって表題は、「もう誰にも書けない鎌倉」でもある。さまざまなエピソードを盛り込みながら、そこに生きた人々の姿を街の変遷とともに伝える。作家の岡松和夫が帯を書いている。
	K1-914.6「かまくら今昔抄 60話」 「かまくら今昔抄 60話 第二集」 清田昌弘・著 (第一集=冬花社 2007年) (第二集=冬花社 2009年)	木村彦三郎、沢寿郎、金子晋らが明治生まれの郷土史研究の先行世代だとすると、昭和生まれの清田氏はそれを継ぐ現役の世代と言える。『鎌倉朝日』に連載されていたものに加筆したものが本書で、鎌倉文士のことから松並木や大震災、戦争遺跡のことなど、鎌倉に起こった出来事、人、風物、建築…など全般にわたり書いている。資料を博搜し

	<p>K1-914.6「私版かまくら今昔抄」 (清田昌弘・著／発行 1989年)</p>	<p>丹念に調べ、出来事への関心を失わない者のみが、かつての歴史をいきいきと再現でき、同時に共に生きる同時代の人々に生きたメッセージを伝えることができると言える。</p> <p>著者の最初の郷土史関係の文集。父祖以来長く住む鎌倉の地の失われた歳月と事物を再現しようとしたもので、社寺のことから横須賀線や職人、年中行事…等々を一ページ項目で記している。本だけでなく絵葉書や写真、包装紙や切符の類に至るまで、丹念な収集や保存なしには日常身の歴史は書き得ないことを教えている。小さなことや細部にこそ真なるものやリアリティーは宿る。</p>
女性史	<p>K1-367.2「かまぐらの女性史 —33人が語る大正・昭和—」 K1-367.2「聞き書き第二集かまぐらの女性史 —明治・大正・昭和—」 K1-367.2「明治・大正・昭和 かまぐらの女性史 年表」 かまぐら男女共同参画市民ネットワーク アンサンブル21女性史編さん部会・編 (鎌倉市人権・男女共同参画課・発行) (正編＝平成16年、続編＝平成18年、 年表＝平成21年)</p>	<p>鎌倉市に在住し、明治・大正・昭和の初めに生まれた女性の聞き書きを集めたもの。戦前戦後の激動の時代を生き抜いた女性の暮らしや仕事の軌跡。時には無理解や幾多の試練に遭いながらも、誠実に生き抜いた人々の言葉は読む人の胸に直接響くものを持ち、今を生きる人を支える力ともなる。この聞き書きは、全て女性史編さん員のボランティア活動によるもので、ともしれば埋もれがちになる暮らしの痕跡や開拓的な仕事の数々や生の肖像を、心をかたむけて掘り起こしている。</p> <p>三巻目の「女性史年表」も大変な労力のもとで編集されただけあって、数々の事実に気づかされるとともに、非常に読みやすい。また、「年表」の各ページ下段にあるコラム記事も読んで楽しいだけでなく、知らず知らずのうちに生きた歴史の世界にいざなわれる。</p>
湘南の先駆者たち	<p>K1-281「湘南の50年—湘南を築きあげた先駆者たち—」 知性社・編 三菱信託銀行・編集協力 (ばら出版 昭和52年)</p>	<p>鎌倉に限らず、この「湘南」地域で、先駆的な活動をしてきた人々を紹介している。流鏑馬保存の金子有隣、鎌倉カーニバル生みの親久米正雄、鎌倉アカデミアの三枝博音、県立近代美術館の土方定一、鎌倉彫の後藤俊太郎郷土史研究の呉文炳、さらには市民の足となっている江ノ電までも含め、20名近くの人々が紹介されている。</p>

【雑誌】

項目	図書	内容
60～70年代の鎌倉市の政治と社会	<p>K1-051「鎌倉市民」 (鎌倉市民社・発行 1960～1977)</p>	<p>食べ物屋や行事を紹介する今日の「タウン誌」とは違い、同じ地域に暮らし共通の問題について幅広く論じあうことを通して一つの共同社会を築こう、という主旨のもとに始められた雑誌。1号巻頭にある「市民の話し合いの広場」という自己規定が生きている。鎌倉の開発をめぐる生じた「御谷騒動」についても主導的な役割を果たし、遂には古都保存法を生み出すきっかけともなった。</p>

郷土史研究

K1-051「鎌倉」

(鎌倉文化研究会・発行 昭和34年～)

こうした人々の活動により絶えず「社会」は再生し、操作対象としての「大衆」ではなく生きた根をもった「市民」が形成される。ただし形苦しい読み物を想像されては困る。桂たかし「鎌倉今昔物語」(165、167号)、沢寿郎・永井路子・小丸俊雄の座談「鎌倉時代を側面から見る」(108～109号)、木村彦三郎「鎌倉現代文学散歩」(48～58号)長峯忠雄「鎌倉の名数」(60～103号)など読み物も充実していた。

「鎌倉」という表題の雑誌は、過去にも明治40年代、大正15年4月から8月、昭和10年10月から昭和15年8月まで、と三回にわたり発行され、郷土史研究の先駆けをなしてきた。現在刊行されているものは昭和34年5月から沢寿郎氏が編集人となって発行されたもので、鎌倉に関することをコツコツ調べたり、活字にされなかった資料なども出来るだけ活字化することを編集方針として季刊で刊行されている。草創期の「鎌倉」には沢氏をはじめ考古学の赤星直忠、美術史の三山進、歴史の貫達人、亀井高孝など錚々たるメンバーが執筆し、その後も若手研究者を中心として資料の発掘に努めている。

K1-210.05「頼朝会雑誌」

(頼朝会・編 昭和5年)
(復刻版 村田書店 昭和54年)

頼朝を中心とした鎌倉の歴史研究の草分けともいえる雑誌で、大森金五郎や亀田輝時、佐藤善治郎など、鎌倉研究の錚々たるメンバーが中心となり、開拓的な研究をおこなっていた。他にも三浦周行、三上参次、西岡虎之助、白柳秀湖などが論説を発表していた。頼朝会は1930年に誕生し、37年まで続いた。中心人物である大森金五郎の死去により全20号で終刊。

K0-210.1「神奈川地域史研究」1984年～

(神奈川地域史研究会・編発行)

年1回程度の発行だが、時々鎌倉に関する論文やシンポジウムが掲載される。たとえば、網野義彦「中世における”場”の問題をめぐって」(第5号、1987年)、「シンポジウム・御成遺跡にみる”古代の鎌倉」(第9号、1990年)、「御成小学校校庭から発見された中世の遺跡について」(第10号、1991年)、藤木久志「中世鎌倉の祇園会と町衆—どっこい鎌倉は生きていた—」(第11号、1993年)、盛本昌広「鎌倉の明かり」(第12号、1994年)、及川清秀「神奈川県下における青年団誌の発行状況と農明文芸」(第19号、2001年)などなど。

K0-018.0「郷土神奈川」昭和49年～

(神奈川県立文化資料館・発行)

この雑誌にも時折り鎌倉に関する論考が掲載される。高木侃「明治初年の縁切寺東慶寺」(第3号、昭和49年)、三浦勝男「鎌倉築港」(第4号、昭和49年)、斉木秀雄「中世鎌倉の街遺構」(第9号、昭和54年)、貫達人「鎌倉幕府と御家人」(第10号、昭和55年)、錦昭江「鎌倉期における円覚寺領の形成過程」、

タウン誌

K3-051「三浦古文化」1966年～1994年
(京浜急行電鉄・発行)

平田恵美「鎌倉アカデミアの人々」(第40号、平成14年)などなど。
なお、同名の雑誌が戦時色の濃い昭和17年1月から昭和19年2月まで発行されている。

京浜急行が文化事業として発行していた雑誌。貫達人「官位と族長」三浦勝男「鶴ヶ岡八幡宮と神仏分離」(第4号、1968年)、大橋俊雄「鎌倉周辺の時宗について」(第8号、1970年)永井路子「三浦四代の人間像」(第10号、1971年)1971年)、安田元久「中世初期における相模武士団」(第12号、1972年)、広井雄一「鎌倉鍛冶—その成立について—」(第13号、1973年)川添昭二「日蓮の出自について」(第14号、1973年)、網野義彦「鎌倉の「地」と地奉行について」(第19号、1976年)、など錚々たるメンバーが執筆していた。残念ながら1994年55号で終刊となった。近畿日本ツーリストが宮本常一を中心として雑誌「あるく・みる・きく」を出すなど、鉄道文化の一環としてこのような雑誌がかつて出されていた。

K0-051「かながわ風土記」1977～2008年
(丸井図書出版・編集発行)

1977年創刊で神奈川県内の地誌・歴史・民俗・人物等を全般にわたり紹介している。木村彦三郎「船乗り地蔵」(9号)、同「異人館と独楽」(56号)、浜太郎「松竹大船物語」(1～34号)、草間俊郎「近代神奈川人列伝—食品界のパイオニアの巻—」(55、56号)同「女子教育のパイオニアたち」(57号)、同「中等諸学校に礎石を築いた人々」(58号)、同「神奈川県民の学習と教育の変遷」(70、73号)清水基吉「扇ヶ谷回顧」(57号)、藤野東伯「久米正雄さんのこと」(89号)、ラファディオ・ハーンほか「外国人の見た明治の鎌倉」(104～115号いずれも長岡祥三訳)…など、記録や読み物で役立つものが多い。

K1-051「かまくら春秋」1970年～
(かまくら春秋社)

1970年創刊のタウン誌。初期には永井路子、安西篤子、澤寿郎などが鎌倉の案内記や歴史・地誌を書いていた。また、鎌倉の今昔を語る座談に有島生馬、貫達人、横山隆一、田村隆一、林房雄、山本道子、小島政二郎、大藤ゆき、養老孟司、早乙女貢、村上光彦、辰巳芳子、平山郁夫、井上ひさし、中村桂子…などなどがあり、また、三木卓の風物誌のほか、発掘やお医者さんの話、季節の花だより等々、小さな雑誌に盛りだくさんの内容と言えるであろう。
また、この雑誌に連載されていた安部公房・斉藤茂吉・中野重治・室生犀星・井上光晴など日本を代表する作家の子息・子女による回想録をもととして「父の肖像 I・II」(平成11年、平成16年)が出版された。

K1-071「鎌倉朝日」昭和54年4月～
(鎌倉朝日新聞社)

朝日新聞購読者に月1回配布されるタブロイド版の新聞。イベント情報のほか、かつては沢寿郎の「知られざる鎌倉」が、現在は清田昌弘

大正時代	<p>(かまくら春秋社 昭和57年)</p> <p>K1-914.6「私のかまくら 今は昔」 中村菊三・著 (中村菊三・発行 昭和60年)</p>	<p>などが自然に語られる。回顧談にありがちな独善や誇張なしに、当時の暮らしぶりが活写されている。沢寿郎が序文を寄せている。</p> <p>前著と内容的に重なる部分もあるが、夏の鎌倉の風景や路地での愉快的思い出、或いは子ども時代に見た大仏次郎や夏目漱石、大杉栄の面影が語られる。「簡素の美」を持ち「当時の素朴で人情豊かな鎌倉の素顔」が、即ち人間が等身大で生きられた時代が語られる。「便利さ」によって何を失ったのかその重さを知ることなしに、無限の前進を図ることは、一路荒廃へと突き進むだけかもしれないことを教える。</p>
大正～ 昭和20年代	<p>K1-291.3「わたしの鎌倉物語—あの頃の鎌倉 ふるさとの鎌倉—」 (リープ企画株式会社・編集・発行 1992年)</p>	<p>主に地域に商店を構える人々の回想録。井上蒲鉾店、一心亭肉店、林家材木店、内田硝子店、清水屋食品店…など合計30人ほどにより往時の鎌倉の姿が甦る。「震災前は下馬の四つ角から由比ガ浜の消防署あたりまでは松林の中に別荘が二、三軒あるくらいで若宮大路の松並木の通りは夜なんか怖くて通れませんでしたよ。」(林茂雄さん) 他にも長谷や由比ヶ浜、大町、小町、北鎌倉、鎌倉山などの住民による座談会も収め、昔の鎌倉の様子が浮かび上がる。なお、「暮らし」の項目に出ている「としよりのはなし」は明治末から昭和初期にかけての往時を知るための聞き書きによる基本資料。</p>
昭和10年代～ 昭和30年	<p>K1-914.6「遠き日々の鎌倉」 石山 陽・著 (かまくら春秋社 平成10年)</p>	<p>昭和11年父親の勤めていた松竹キネマ蒲田撮影所が大船に移転するに伴い、鎌倉に住むことになった少年時代から、戦争国家へと傾斜してゆく昭和10年代、そして戦後高校生となった青春時代を経て、世の中に出るまでが、鎌倉の風物や出来事をまじえて語られる。</p>
昭和初期～	<p>K1-914.6「昭和の鎌倉 私の思い出」 今田正廣・著 (かまくら春秋社 平成18年)</p>	<p>大正15年に生まれ、当時としてはハイカラなハリス幼稚園に通い、御成小学校に通い…といった生粋の鎌倉人による思い出の窓口から覗いた昭和の鎌倉風物史。金融商品などという「記号」を操作する「虚業」ではなく、家具屋さんの二代目としてもものづくりにかかわる「実業」家として実直に、そして飾らない人柄そのままに商売のことや出会った文人のこと、鎌倉アカデミアのことが語られる。友人諸氏による短いコラムのほか座談も収められ、井上ひさしが序文を寄せている。</p>